

クリスティーヌ・ラスカム教授, 長谷川美貴教授が IUPAC 役員に選出

クリスティーヌ・ラスカム教授, 長谷川美貴教授の IUPAC 役員就任 に寄せて

クリスティーヌ・ラスカム教授（沖縄科学技術大学院大学）が IUPAC 副会長に、また、長谷川美貴教授（青山学院大学）が IUPAC 執行理事に就任した。クリスティーヌ・ラスカム教授は、2028～2029 年の IUPAC 会長に内定している。長倉三郎教授が 1981～1983 年に、続いて巽和行教授が 2012～2013 年に会長を務められて以来、15 年ぶりのことである。今回、選出された 2 名の先生方には化学における世界のリーダーとして、国内外の各機関の連携をさらに強化され、化学の発展と社会への普及を推進されるよう期待したい。

IUPAC（国際純正・応用化学連合）は、世界各国の化学者を代表する機関によって構成される自発的・非政府・非営利の国際学術団体であり、1919 年に創立され、現在では 53 の国や地域を代表する化学関連組織によって構成される、いわば「化学の国連」ともいえる国際機関である。学術国際交流、人材育成、そして国際的な格差の是正など、幅広い活動を展開している。また、新元素の発見を認定し、命名権を付与するなど国際的に極めて重要な貢献を果たしている。特に、113 番元素（ニホニウム）の発見は日本の研究グループによって成し遂げられ、

IUPAC によって認められ命名権が日本に与えられたことは、日本の学术界にとって非常に意義深い出来事であった。日本では、日本学術会議が IUPAC の責務を担っている。その窓口は、日本学術会議の化学委員会 IUPAC 分科会であり、日本化学会がその活動を側面から支援している。

おりしも、2028 年に日本化学会は創立 150 周年を迎える。この素晴らしい節目の年に、日本、そして世界に向けて化学が豊かな未来社会を約束できることを示したいと思っている。

（日本化学会会長 丸岡啓二）

クリスティーヌ・ラスカム教授の抱負

クリスティーヌ・ラスカム教授（沖縄科学技術大学院大学（OIST））



国際純正・応用化学連合（IUPAC）の副会長兼次期会長に選出されたことを、大変光栄に思う。この役職において、世

界の化学界に貢献できる機会を得たことに、心より感謝している。この役職に就くにあたり、本連合の過去とダイナミックな未来を強く意識している。

1919 年に設立された IUPAC は、国際協力を促進し、化学の分野で普遍的な基準を確立したいという共通の願いから生まれたものである。1 世紀以上にわたり、本連合は化学命名法、専門用語、標準化された測定法、原子量、その他多くの重要な評価済みデータに関する世界的な権威であり続けてきた。共通言語を創出することにより、IUPAC は世界中の化学者がコミュニケーションをとり、協力し、人類の利益のために科学を進歩させることを可能にしてきた。本連合は、純正化学および応用化学の進歩に貢献する、非政府の客観的な組織として存在している。

私は 2012 年から IUPAC とともに活動しており、その年に Division IV（高分子）内の Subcommittee on Polymer Terminology（SPT）に参加し、翌年には Subcommittee on Polymer Education（SPED）に参加した。2014 年から 2015 年にかけて SPT の書記を務め、2016 年には Division IV の副部門長に選出された。また、Interdivisional Committee on Green Chemistry for Sustainable Development（ICGSD）の最初のメンバーの 1 人でもあった。2020 年から 2024 年まで部門長を務め、その

間、Subcommitteeの連携を強化するために小委員会委員長との隔月会議を開始して対話を促進し、私たちの活動のインパクトをより良く追跡できるようにGoogle Scholar ページ (<https://scholar.google.ca/citations?user=5lyTJsEAAAAJ&hl=en&authuser=2>) を作成した。これらの年間、Evaluation Committeeのメンバーを務め、現在は同委員会の委員長を務めている。理事会の一員であることに加え、評価委員会の委員長として、科学評議会の会議にオブザーバーとして参加してきた。過去13年間にわたりIUPACに深く関与し、現在進行中の変革にも積極的に関わってきた。

IUPACは岐路に立っており、財政的な制約がある中で、急速に進化する科学の世界における自らの役割を再定義するにあたり、課題と機会の両方に直面している。歴史的に、IUPACは化学命名法と標準の管理者であったが、今日では、化学がますます学際的、デジタル的、そして応用主導型になっている世界に適応する必要がある。IUPACの副会長として、メアリー・ガソン氏が科学評議会の設立において築いた基礎を引き継いでいく所

存である。次期副会長の下で、IUPACの実際の再編が行われる必要がある。私は、自身のグローバルな経験を活かしてIUPACを安定した未来へと導いていきたいと考えている。

長谷川美貴教授の抱負

長谷川美貴教授（青山学院大学理工学部）



IUPAC執行理事に選出され、身の引き締まる思いです。歴代の日本代表委員の先生方が築いた世界からの信頼の礎を強く感じました。特にクリスティーヌ・ラスカム先生が副会長にご就任された歴史的瞬間にも立ち会え、この感動が2026年からEB（Executive Board：執行理事）としての活動の原動力になります。ラス

カム先生と連携してお役に徹し全うすべく努力します。

2009年無機化学分科会（Div. II）に日本代表として出席してからIUPAC Volunteerの活動は16年目を迎えました。Volunteerは英語では「自発的に行うこと」を意味し日本語と異なります。この間、巽和行先生の副会長ご就任の瞬間や、ニホニウムを含む5種の元素の命名作業にも立ち会いました。IUPACは共通の定義を作り出す労力を惜みず、広義の教育や化学産業や環境課題に積極的な委員で構成されています。皆さんの課題発見能力の高さと哲学の深さに感嘆しております。

現在はNAO（National Adhering Organization）所裕子先生、IUPAC賛助委員会山根常幸委員長をはじめ、日本代表委員・ご関係各位の活動が、世界の化学への日本の存在意義を高めて下さっています。世界は日本に期待しています。化学の視点で数々の社会問題解決の糸口を探しましょう。今後ともご理解、ご指導下さい。よろしくお願ひ申し上げます。

© 2025 The Chemical Society of Japan